法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-04

〈書評と紹介〉村上直監修『下野国近世初期文書集成』第一巻（白川部編），第三巻（白川部・竹中編）

横浜，文孝

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
46
(開始ページ / Start Page)
204
(終了ページ / End Page)
206
(発行年 / Year)
1994-03-24

Hosei University Repository

〈書評と紹介〉

村上直監修『下野国近世初期文書集成』第一巻（白川部編）・第三巻（白川部・竹中編）

横浜　文孝

一

自治体史編さん事業は、これまでの地域史（地方史）研究を進めるうえで、大きな役割を担ってきたといってよい。この事業は、ちょうど我が国の高度経済成長期に併わせるかのように開始され、現在にいたったものである。ただ、七〇～八〇年代までのような一時期の隆盛は去ったとはいえ、なお刊行準備を進めているところも多くあり、今後の成果が待たれている。

しかし、自治体史は、すべての史料を網羅することが極めて難しいなど、制約も多い。そのため編さん事業は、その後の展開を予測した長期的な学術推進の施策を、行政として示しておくべき性格のものであろう。もちろん、博物館・図書館等において、地道な努力が続けられているものの、全体としては研究を推し進めるための環境と体制作りが、十分に確保されていないのが現状ではなかろうか。それらを克服するには、一層の地域史研究の促進が求められるのである。

さて、このような状況のもと、このたび村上直氏の監修、白川部達夫・竹中真幸両氏の編集により『下野国近世初期文書集成』第三巻が上梓された。すでに第一巻は白川部氏の編集で公刊されており、今回で二冊目ということになる。この栃木県（下野国）下の自治体史編さん事業はブームの渦中に始まった県史もすでに終了し、各市町村史レベルの刊行も、ここにきて一段落した観がある。その意味で本書は、これまでの県下自治体史の成果を近世初期農村史料に絞り、それをさらに補うものとして、時宜をえた企画であり、刊行の果たす意義は大きいといえるであろう。

以下、本書について、紹介しておくことにする。

二

近世の下野国は、日光に徳川家康の廟所である東照宮が設けられたことで、クローズアップされるようになった。そして、それによって同国の近世的役割は高まり、関東領国内の位置をより明確なものにしたといってよい。

本書監修の村上氏は、この歴史的重要性をより強く認識することで、さきの県下の自治体史編さんの現状から成果を継承し、さらに地域史研究促進が図られることを意図しているのである。と同時に、本書の最大のポイントは、南関東の『武州文書』『相州文書』等に対して「北関東では、未だこれに類するものは見当らない」とする点であり、本書の性格を見極めるうえで重要であろう。

ここで、本書の刊行計画を左記に示しておきたい。

第一巻　都賀・寒川郡　(1)（既刊）

Hosei University Repository

第二巻　都賀・寒川郡　(2)
第三巻　安蘇・足利　梁田郡（既刊）
第四巻　河内郡
第五巻　芳賀郡
第六巻　那須・塩谷郡

すなわち、本書は下野国九郡を全六巻にまとめあげるもので、まだ緒についたばかりだといえよう。ただ、気になるのは、刊行年次が第一巻と、今回二冊目の刊行となる第三巻までに約七年を経過しており、そのペースがやや遅滞しているのではないか。その背景には、県下全域を見渡す未収録史料の確認作業等のさまざまな理由もあげられようが、希望をいえば、さきの意義ある企画とするためにも、その編集ペースを早めることが要請されるであろう。幸い編集の白川部・竹中両氏は、『小山市史』をはじめとする周辺地域の編さん事業をこれまでいくつか手懸けるなど、当地域の史料を把握するうえでも心強い陣容であり、今後の計画的刊行が速やかに果たされることを、まず期待したい。

三

本書全体の編集方針は、天正一八年（一五九〇）から寛永二一年（一六四四）までの五五年間の史料を収録することにある。

まず、第一巻から取り上げておこう。同巻は、「都賀・寒川郡(1)」とあるが、ほぼ大出善作家からなり、全体も都賀郡初田村の初期文書集成であるといってよい。この多くは、すでに『小山市史』史料編近世1に収録されているが、今回その全貌が明らかにされた意義は大きい。

同巻では、文禄四年（一五九五）を上限に寛永二一年までを対象にしており、年不記文書も含め一一一点、および附録二点を加えた一一三点が収められている。史料の編集にあたっては、領主交替期に視点を置いた三部構成からなり、その時期の特徴をより明確に位置付けられるものになっているのである。各時期の収録状況は、文禄四年―元和八年（一六二二）が一七点（一五・三％）、同八年―寛永一〇年（一六三三）が三四点（三〇・六％）同一〇年―同二一年が三七点（三三・三％）となり、ほかに年不記分二三点（二〇・七％）で、全体では六割強が元和八年―寛永二一年に集中している。なお、このうち年不記文書が二割を占めているが、これは今後研究を進めるうえで、年代を確定していく必要があろう。

土地台帳としては慶長一八年（一六一三）の本多正純による領内総検地にともなう初田村検地帳（前田韶家文書・写本）が上限である。また現在井口喜市家文書で確認できない元和九年の初田村地詰帳と寛永六年の初田村上下わけ帳を日本大学近世史研究会の筆写原稿から今回収めるなど、近世初期の村の状況を把握するには貴重である。さらに、元和八年を中心とする古河藩の給人知行の内容を示す史料、寛永三年の「下初田村いぬえくみ書上」とした五人組の早期のものなど、盛り沢山な内容となっている。

次に第三巻を取り上げよう。同巻は「安蘇・足利・築田郡」の県南西部の三郡を対象にしている。しかし残念なことに、築田郡の近世初期文書はいまだ未発見とのことで、ここでは郡名を掲載

Hosei University Repository

するに留まっており、今後の成果を期待したい。

本巻は、全体で一〇八点の史料を収録している。そのうち一〇二点が安蘇郡にかかわるもので、福地家文書が四三点、惣宗寺文書九点、諸家文書五〇点となる。附録一点は、「佐野肥前守義行書上」で、これは内閣文庫記録御用所本『古文書』にあるもので未紹介史料とされている。残る五点が、「足利・築田郡文書」である。

さて、本巻にあって多くを収録する福地家は、佐野氏の家臣として、またのち本多氏・稲葉氏の堤肝煎役を命じられるなどの経歴をもった家柄とされる。そのためか史料的にも書状が極めて多いのが特徴的であり、稲葉正勝の家臣などとの交流も知ることができ、面白い。

諸家文書は、天正二〇年（一五九二）の豊臣秀吉から佐野氏宛の朱印状などを収録する。また、幕府の聖地日光を抱えることから、史料内容上注意すべき点もあるが、元和三年（一六一七）「日光御用村々人足組合割帳」「東照宮権現様御尊骸久能より日光へ御移被成候節帳」は同地域を考えるうえで重要なものといってよかろう。

また、足利・築田郡文書は、天正一九年の築田郡八幡村の検地帳があり、徳川家康の初期検地の形態を知ることができる。

以上、本書二冊について、簡単に紹介してみた。すなわち、本書は、近世初期の下野国を探るうえに貴重な一足を投じる成果といえるのである。

四

「二」の部分でふれた本書の意義は、南関東に対する北関東の存在にある。その意義をさらに高めるためには、刊行計画の全六巻に留まることなく、現状でクリヤーできていない地域を含めた補巻が望まれよう。いずれにしても、三冊目以降の刊行が待たれるところである。

〔第一巻―A5判　二六〇頁　四五〇〇円、第三巻―同判　二七二頁　六〇〇〇円　文献出版〕